2024 年度　男女共同参画推進 Q&A 参加型ランチョンフォーラム　開催報告

日本遺伝学会第 96 回大会（高知工科大学）の初日（9 月 4 日）に、I 会場（食堂）にて男女共同参画推進ランチョンフォーラムを開催しました。

今回のタイトルは、

「『子ども・仕事・上司・理解・研究・できない・学会・いけない、、、』

アンケート調査から見えてきた、みんなの悩みのキーワード。

でも解決のヒントはあるはず。さあ、Slido であなたの意見を届けよう！」

でした。このタイトルの中の悩みのキーワードは、遺伝学会員の皆さんに事前に実施したアンケート調査の分析から、特に多かったものを使用しました。今回は初の試みとして、ランチョンフォーラムの現場においても Slido を使ったリアルタイムのアンケートを実施しました。アンケートの結果より、当日は約 110 名（性別回答者は、男 61 名、女 25 名）の方にランチョンフォーラムに参加して頂いたことがわかりました。

最初に、岩崎博史遺伝学会会長から、開催のご挨拶を賜り、日本遺伝学会は男女共同参画にたいへん力を入れていること、高知工科大学は建物が非常に綺麗で講義室で飲食ができないため、食堂でランチョンセミナーが開催されることになったこと、Slido を使った双方向のランチョンフォーラムであるというお話をして頂きました。

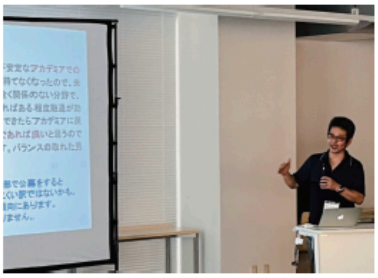
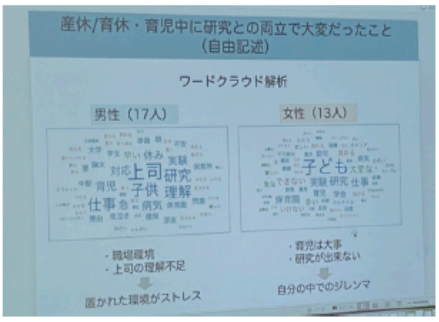
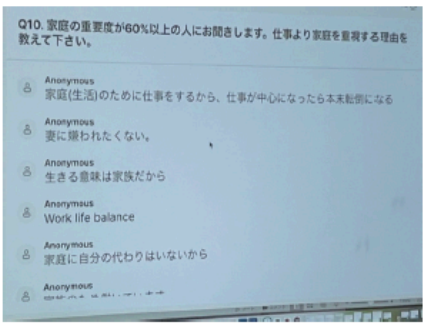
続いて、一柳健司・男女共同参画推進委員長から、男女共同参画推進委員会の活動、また男女共同参画に関連する状況の説明がありました。まず、男女共同参画推進委員の今年度の活動の一つとしてのアンケート調査の報告がありました。続いて、子育て中や介護中などの家庭の事情で大会参加が困難なケースに関して、5 万円まで補助できる大会参加支援制度についての紹介がありました。例えば、育休中の場合、大学では出張命令を出すことができないので、科研費や大学からは出張費用が支出できません。このような場合に、大会参加支援制度の補助金が使用可能なこと、また、出張中の旅費以外にも、親やベビーシッターに来てもらうなどの用途にも使えることが説明されました。また、日本遺伝学会会員における女性会員の割合が年々増加しており、特に学生会員の割合が増えてきていることが説明されました。特に、昨年に比べて今年は、ワークショップの講演者の女性の割合が 17%から 32%に、シンポジウム・ワークショップの世話人の女性の割合も 18%から 44%に急増したことが報告されました。他学会のように、ワークショップの発表者や世話人に女性が入ることを優遇するような措置をしていないのにも関わらず、女性の割合が多いことから、本学会は女性の積極的な参加が伺えます。

例年は、次に基調講演が行われていましたが、今年は、新たな試みとして Slido を使って会場に集まった会員からのリアルタイムのアンケート調査を実施しました。具体的には愿山郁・男女共同参画推進委員が、事前のアンケート調査結果の分析からわかったことをスライドを用いて説明しながら、リアルタイムの新たなアンケート調査を進めていきました。まず、練習を兼ねて行った今回のランチョンに参加した最大の理由の質問について、最も多い

回答は「無料でお弁当が食べられるから」でした。続けての「子供を持ちたいですか?」、という質問には「はい」の意見が多く、「子供を持つタイミングは考えますか?」、「複数の子供を持つことを躊躇しますか」という質問にも「はい」の意見が多かったものの、意外に「いいえ」の意見もそれなりにありました。「夫婦で子育てへの関与」についての質問では、若い世代ほど、両方とも関与する傾向がありましたが、年配の世代ほど女性が関わる比率が増えていました。ここまで、リアルタイムアンケートを行ったところで、事前のアンケート調査の結果報告がありました。まず、「育児と研究の両立で大変だったこと」についての自由記述のアンケート調査の結果を、記述の内容に使われている単語のワードクラウド解析の手法を用いて分析したところ、「男性は職場環境や上司の理解などがストレスになっている」一方で「女性は子供のことが最も気がかりで研究したいのにできないことがストレスになっている」という結果が示されました。また、研究継続に必要だと思う支援についての事前の自由記述のアンケート結果では、女性からは、「保育園を含む家事・育児支援」、「意識改革」、「男女間の不平等の解消」の要望が多いその一方で、男性は、「安定した雇用」、「研究や教育業務の支援」のサポートが必要だと考えている傾向が見えました。一方、雇い主側に対してのアンケート調査結果では、研究と育児を両立する際の問題点として「プロジェクトの進行が止まる」、「代わりの人材の確保」との指摘があったと報告されました。一方、ジェンダーギャップの小さい海外では、研究と子育てをうまく両立していると予想して、海外研究者に対する事前アンケート調査を行った結果が報告されました。意外にも、「子供を持つことに抵抗がある」、「子供を持つタイミングは考える必要がある」と答えた人の割合は日本よりも多いということがわかりました。また、日本と同じように、育児は主に女性が行なっている傾向がありました。また、日本の育休制度は、父親の取得できる休暇の日数が世界で最も多く、世界一の制度であることが紹介されました。その一方で、男性の育休の取得率は、北欧に比べるとまだまだ低く、日本の男性が育休制度を活用する雰囲気はまだまだこれからだろうということが報告されました。最後に、ここまでの報告を踏まえて、再度現場でSlido を使ったリアルタイムアンケートを行った結果、若い世代の方ほど、「育休制度を最大限活用したい」という意見を持っていることが認められました。一方、そこまで育休制度を利用しない理由としては、「研究を止めたくないから」という意見が多くありました。

最後に愿山郁・男女共同参画推進委員から、総括として、次のようなお話がありました。「どのようなライフプランを選択するかは、ひとそれぞれです。育児に関して、どのような制度があるのかを知ることで選択肢が増えます。世界一の育休制度を大いに利用しても良いし、少しだけ利用しても良いし、自分に合った方法を見つければ良いと思われます。男性でも頑張って育休を取ってくれることで、女性の負担が減り、女性の研究者が早く研究に復帰できるチャンスが増えます。そのため、女性側にとっても、男性が育休をとることは良いことです。世代によって考え方はだんだん変化しており、若い世代は男性も育児に参加したいひとが増えてきています。そのため、雇い主や研究室の上司の方は、考え方を変えて、若い世代の研究者の考えを受け入れることが必要になってきています。遺伝学会では、どうし

たらみんなが研究を続けていけるのかを模索しており、一緒に考えてくださる仲間を募集しています。様々な学協会が加盟している男女共同参画学協会連絡会による大規模アンケート調査結果の意見を、内閣府に提出することで、RPD 制度の設立など、国の政策に反映された実績があります。声をあげれば変えられる可能性があります。」

今回のランチョンフォーラムは、初めて Slido を使ったため、パソコンの設定に戸惑い、すぐに開始することができないというトラブルがありました。しかし、リアルタイムでのアンケート調査を取り入れたことで、会場からの意見を視覚的に体感することができ、とても面白かったという意見が多く、大成功でした。

（文責　安田武嗣）